

## 特別寄稿

## 視覚リハの未来像を見た

## 高知リハ研究大会に参加して

視覚障害リハビリテーション協会長 古野由美子

高知市朝倉の福祉交流プラザで先月6日、第43回高知県リハビリテーション研究大会が開催された。この研究会は20年以上の長い歴史を持つ総合的リハビリテーション研究会で、年に2回ほどリハビリテーションに関するさまざまなテーマで大会を開催している。今回の大会テーマは「高知家で支える視覚障害リハビリテーション」知つちゅう?見えない見えにくい人の生活のヒントやケアのコツがあるがやきくで、このような総合的リハビリテーション研究大会で、視覚障害がメインテーマに取り上げられるのは、日本初のことではないかと思うほど珍しいことである。

43回大会実行委員長に選ばれた視覚障害訓練指導員の別府あかねさんと私は11年間、高知で視覚障害リハビリテーション

(以下、視覚リハと略す)の普及活動に取り組んできた関係で、大会で「誰でもいつでもどこに住んでいても受けられる視覚障害リハをを目指して」というテーマで講演させていただきことになり、大会の準備段階から関わらせていただき参加した。

なぜ今まで「総合的なリハ研究会」などで視覚リハはテーマにならなかつたのかと言ふと、我が国は視覚障害を自慢としているが、視覚障害者に対するリハビリテーションを所持している視覚障害者は約31万5千人と推計されており、非常に少数であると考えられるし、世間一般では視覚障害者というのを全然見えない人(全盲)のみというイ

メージが定着していることもあり、視覚障害者と日常のリハやケアの現場で出会うことは滅多にくく、また出会ったとしても「どう接してよいか分からない特殊な問題」として見られているからだと考えられる。

## 他業界との

座談会で意見を述べ合う参加者  
(左から4人目が吉野会長)



そんな中リハ研ではがテーマにたのだろう。高知での視スの提供との連携のところが、高知県でてている視覚以上が65歳である。高知のリハビリ目標すとこえ、「暮域で、日々がいを持つてせるようある。この口るために、切活訓練指導員士が毎日を行つて相談や訓練をするこことは不可能できたとしてそれが効果うか。そろうか。毎日接族やホームイサレビスのえない、見